共同運営部門：リハビリテーションセンター

ー関係部署ー

役　　職	スタッフ名
センター長兼外傷機能外科部長	小野　秀文
技術科長代理（理学療法士）	石田　恭子
技術科長代理（理学療法士）	津野　光昭
主幹（理学療法士）	大野　直紀
主査（作業療法士）	藤田　将敬
主査（言語聴覚士）	一柳　律子

【スタッフ数】

医師:1名
理学療法士:23名
作業療法士:10名
言語聴覚士:6名
事務員:2名　　計:42名

ー概要ー

リハビリテーション科では理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の3職種が、発症後(手術後)早期より医師・看護師等の他職種と連携を図りながら、早期離床・日常生活動作の獲得・廃用症候群や呼吸器合併症の予防・摂食嚥下機能の改善を目的にリハビリテーションを実施している。患者に対し、継続したリハビリテーションを提供する為に、土、日、祝日にもリハビリテーションを実施している。入院患者以外では、外来の心臓リハビリテーションの実施にも積極的に取り組んでいる。外来では、日常生活、栄養なども含めた総合的な指導も実施している。

【理学療法部門】

理学療法部門では、各診療科において急性期の患者を中心に入院直後より積極的な介入を行っている。入院患者以外にも外来の心臓リハビリテーションを毎日実施すると共に患者の個々の運動能力に応じた運動処方を行えるよう心肺運動負荷試験（CPX）の実施も行っている。また院内の活動では、呼吸サポートチーム、緩和ケアチーム、糖尿病教室や生活習慣病予防教室への参加を積極的に行っている。

【作業療法部門】

作業療法部門では、脳疾患部門、整形部門、集中治療部門の患者に対し、日常生活動作の改善や周術期におけるせん妄の改善を目標にリハビリテーションを施行している。それと共に日常生活動作の方法を安全に施行する為のパンフレットの作成や福祉用具の紹介、提供も行っている。また院内の活動では認知症サポートセンターへの参加を行い認知症患者への介入も行っている。

【言語聴覚部門】

言語聴覚部門では、脳血管障害の患者を中心に嚥下障害、高次脳機能障害、失語症へのリハビリテーションを実施している。院内の活動では、病棟看護師と協力し摂食嚥下療法にも取り組むと共に、病棟スタッフに対し摂食嚥下の研修も行っている。

ー実績ー

(表1)　　2020年度リハビリテーション科実績

	新患数(延べ人数)	実施単位数
理学療法部門	4,363名	81,494単位
作業療法部門	2,719名	36,389単位
言語聴覚部門	1,959名	12,707単位
心臓リハ外来	756名	2,268単位
入院サポートセンター	447名	

今年度は、コロナウイルスの影響もあり各部門共に患者数が減少した。各診療科からの依頼として救命診療科・救急科の依頼が多く全体の約40％前後を占めている。

また昨年度同様に心臓リハ外来、入院サポートセンターでの運動指導も積極的に介入を行っている。

ー今年度の成果と反省点ー

今年度の成果としてコロナウイルスの患者に対し理学療法士を中心として積極的なリハビリ介入を行った。介入の際は、医師・看護師と密な連携を取ると共にリハビリスタッフも徹底した感染予防を実施し介入を行った。理学療法部門では、昨年度に引き続き人材の育成を目標に挙げ教育を実践した。それにより集中治療領域に対応したセラピストの拡充を図ることができた。作業療法部門では、認知症ケアセンターへの参加を積極的行うと共に泉佐野市での認知症事業にも職員を派遣することで行政との密接な関わりを構築することが出来た。言語聴覚部門では、他部門と共同し摂食嚥下ワーキンググループの活動を行い、各病棟に対し統一した嚥下の指導を行うことが出来た。また集中治療領域ではVEの検査も開始した。各部門では業務の効率化を目標に臨床業務を実施した。医師(リハ医)が事前に評価を行い介入時期の検討を行うことで適切な介入時期、介入時間を図ることができた。今年度の反省として脳血管部門での日常生活動作への積極的な介入はコロナウイルスの影響により介入が不十分であったことが挙げられる。

ー来年度への抱負ー

来年度の抱負としてリハビリテーション科では、周術期の患者に対し質の高いリハビリテーションを提供していきたいと考える。特に脳血管領域のリハビリ実施時間を増加させてより密なものにし患者の「セルフケア」に着目し患者のADLの改善に直結したリハビリテーションを適用していきたいと考える。